郷土はんのう

第23号

◆ 飯能と高萩を結ぶ中山氏(坂口和子)・・・2
◆ 飯能の古民家を調査して(丸山清)・・・3～4
◆ Q子ちゃんとAおじさんの
飯能の歴史おもしろ問答(吉田靖)・・・2～7
◆ 飯能の祭り(加藤義雄)・・・・・・・・5～6
◆ 郷土館のイベント(大野悦子)・・・・・・7
◆ 裂き織りの知恵(小沢和子)・・・・・7～8
◆ 新年度事業計画(案)、郷土史研だより・・8

飯能と高萩を結ぶ中山氏

坂口和子

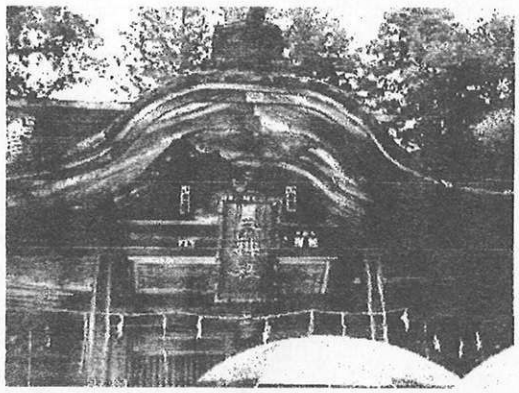
飯能市中山に館を築いた中世の武将、**中山家勝**、その子**家範は武勲**の誉れ高い名将でしたが、家範は豊臣秀吉の小田原攻めの折八王子城で壮絶な討ち死に、中山館に落ちのびた。その**子照守と信吉**は家康に見出されて徳川幕府に仕官します。兄照守は二代将軍秀忠に仕え、信吉は家康の信任を得て、水戸藩の**初代藩主頼房の附家老**に任命されます(当時三十三歳)。徳川御三家の附家老は大名に準ずる格式がありました。信吉は寛永十九年に没しますがその子信正が松岡(現高萩市)に二万石の領地を与えられます。六代信敏のとき五千石加増されて**松岡領二万五千石**になりました。飯能中山館の豪族中山信吉の系統は松岡領の領主であり、その**菩提寺が智観寺**であることから三者のつながりが生じたわけであります。

○研修行程

相にくの雨のなか一行は昼頃**高萩市文化会館**に到着。市の関係者に出迎えられ会議室で昼食、その折市議会中の多忙ななか岩倉市長さんがご挨拶に来場されました。つづいて作山文化財専門委員の講話、江尻文化財審議会委員長、神永郷土史研究会長による質問タイムを設けていただき学習。その後「高萩市歴史民俗資料館」で横山社会教育指導員から詳しく資料の解説と松岡領の歴史を拝聴しました。事前学習を充分受けたのちバスで移動し、松岡城址周辺の見学に出かけました。

・関根の夕照・という松岡八景の一つである関根川のたもとから、真すぐにきれいに整備された道が続きます。

お屋敷通りといってかつての中山氏家臣の屋敷が古風なまま両側に並んでおり、その中に日本植物学の先駆者**松村任三博士**の生家がありました。



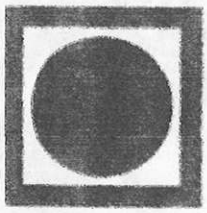
三神社

牧野富太郎博士はお弟子さんです。道のつき当りに広い敷地をもつ松岡小学校があり、その向こうにやさしい形をした小山、**竜子山(たつごやま)**が見られます。竜子山城(松岡城)はここに築かれたそうで、現在は何ものこっていないそうです。が、堀の跡が昔を語っています。この山の麗に**丹生神社**があります。飯能市諏訪神社境内にある丹生神社と同じです。中山氏の遠祖が紀州丹生川流域の天野村に丹生都比女命(にうつひめのみこと)を祀ったのが起源で、丹生神社は中山氏の氏神です。

二代目信正が松岡領を与えられると氏神として領内に丹生神社を建てました。そのご常陸太田へ所替えになると神社も移されましたが、十代信敬(のぶたか)が松岡に戻ると文化二年に現在地に丹生神社をたてたということです。**三神社**といって丹生都比女命と天満宮、稲荷社を合わせて祀っています。中山氏の家紋**「枡に月」**が目立っていました。この丹生神社の祭礼には**「棒ささら」**が奉納されるということです。

雨降りでなければ中山氏と家臣団の墓所を見学する予定でしたが、残念ながら割愛いたしました。

車は常陸太田市の宿舎「ときわ路」にむかい車内も郷土史研究の面々にふさわしい学習が伝わってきました。



中山氏の家紋
「枡に月」

Qちゃんと Aおじさんの 飯能の歴史おもしろ問答 (その4)

封建時代の殿様と農民 良い殿様は居なかった

▽Q子ちゃん…いままでのAおじさんの歴史の話、「高麗郡の創設」とか「中世の飯能丹党武士団の活躍」そして前回は「飯能周辺を始めとする百姓一揆」だったけど、四回目の今回はどんなお話かしら…

▼Aおじさん…今日は江戸時代の大名、いわゆる殿様と一般農民の関係について話そう。したがって郷土史とはややかけ離れるけど、歴史を勉強する上で非常に重要なことなので、ぜひ触れておきたいと思ってね。

▽「殿様と百姓」。なにか面白そうね。テレビドラマみたいな話になるのかしら。

▼残念。今日の話も面白いというわけにはいかない。

▽わかっているって。どうせお堅いAおじさんのこと。面白いはずがないもんね。安心して!。(笑い)

▼では始めよう。おじさんはお城見学が大好きで、よく出かけるんだ。

▽知ってる知ってる。以前文化新聞にシリーズでルポルタージュ書いていたでしょ。私、読んだわ。

(3ページへ)

飯能の古民家を調査して

丸山清

まがきまえ

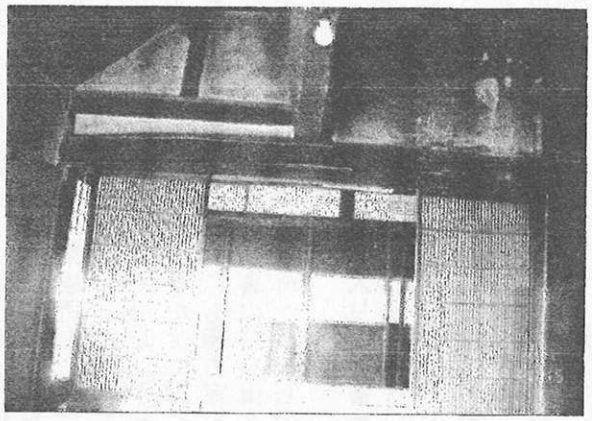
「古民家」の調査は、飯能市の単独事業で平成六年度から十二年度まで約七年間。私が担当した「悉皆(しっかい)調査」基本的な組み立てに約一週間費やした。すでにその時は埼玉県文化財保護課が窓口で、平成五年度から「庭園調査」の第一次調査が開始されていた。結局、両者の調査で同じ家にお邪魔することもあった。

古民家の対象は、基本的に「**農家と町屋**」に大別した。それは神社・寺院の庭・築山・池等も含まれていた。両者の調査票の様式はある程度共通点があったのでほっとした。当時県内の市町村数は九十二市町村であり、調査した件数は、飯能市が一番多く、県外の取り上げた件数は、七十件だった。古民家の調査を併合させての「稼働」は雨風いとわず続けた。旧一町六ヵ村全域に及び一日平均六十キロぐらい走行した。

「庭園調査」が平成七年三月で打ち上げになる見通しがついた頃、埼玉県立博物館が窓口で全国に先駆けて県内の「近代化遺産総合調査」を委嘱されたがこの調査は別の時にゆずりたい。今回は古民家の農家を主体として、庭園と民俗をお話したい。

◎歴史庭園と民家は関連性がある。当市の東の方、旧精明村・加治地区の岩沢北部・笠縫地区等は昔から「農耕を中心として地域づくりや生計を立ててきた」したがって、名主や村長・村会議員・医者・神官・住職等の地域の役職をした家、屋敷・植木等に歴史と伝統を語るものがある。しかし対象とするものが少なかった。

◎旧精明村で先祖が村長をしたという家。さすがは格式のある家づくり、門構え土蔵等はりっぱだ。主人を始め家族の人柄がよく、歴史と伝統を感じさせられた。



さてこの旧村長さんの蔵の梁(はり)の一部だが、普通の角度から見ては何も変わった所はない。しかし上面がえぐられている。江戸時代に建てられたもので当時、役人に「家あらため」をされた時、見られたくないものを入れておいたという。脇差し一本ぐらいが入る深さである。大きな納屋が小畔(こあぜ)川の水路の上に建てられている。公(おおやけ)に水路敷を借用しているのは珍しい。井戸と水路の石垣は見事だ。現狭山市の「茂七さん」という石工が組んだという。この人の組んだ石垣の石は抜けないそうだ。石垣は「歴史的庭園調査」の対象である。吾野の坂元、小床橋を渡った左手に中村さんという旧家がある。茂七さんの手によって基礎を築いた石垣は城壁のようで中間が反り返り見事な曲線美だ。

◎旧加治村前カ貫清川橋の少し上流左岸成木川を南に望む旧家。江戸時代に建てられたという入母屋造り、間口十一間・奥行き七間ぐらい、屋根は屋根材の組み合わせで特徴があるという。藁に茅(かや)、杉の皮を混ぜたり重ねたりする方法を採用した構造で長持ちする。母屋はかなり改築されているが骨組みは百年以上の歴史を持つ豪壮な造りである。母屋の西側、土蔵との間に小さいけれど「枯山水」を取り入れた庭は、旧家の趣を見せてくれる。桧(ひのき)の木の皮で屋根をふいたものを桧和田(ひわだ)葺きという。神社・寺に多く使われていた。後に一般民家にも使われた。萱葺きは、金持ちでないとできなかった。

◎成木川、入間川、中藤川沿いの支流をさかのぼると段々と耕地面積も少なくなり難しい地形になるので民家の構造にも大きな変化が出てきた。全農家に共通することは「養蚕」が出来る構造が多い。骨組みの部材

(2ページより)

▼ほう、Q子ちゃん読んでくれたんだね。うれしいな。で、各地の城を回って、おやっ？と気付いたことがあるんだよ。それは、どこへ行っても城下の人々は「うちの殿様はりっぱな方だった」といって胸を張ることなんだ。悪殿様という声は一度として聞いたことがない。地元自治体が発行している歴史パンフでさえ「おらが殿様はりっぱ」という観点から文章が書かれている。おじさんはそこに疑問を感じた。

▽じゃあ「良い殿様ばかりではなかった」とでも言いたいの。けどテレビドラマでもマンガ本でも、時代小説でも登場するのは立派な殿様ばかりよ。悪いのは部下の奉行とか代官、家老たちで、「悪殿様」はほとんど登場しないわ。「悪殿」といえば田沼意次や柳沢吉保、吉良上野介などがチャンピオンだけど、その「悪殿」でさえ地元城下では「りっぱな殿様」で通っているという話を聞いたことがある。ということは当時「悪い殿様はどこにもいなかった」ということじゃないのかしら。

▼さあ、そこが問題なんだ。たしかに殿様は人柄という点では、なに不自由なく育てられ、欲しいものは何でもてに入る。学問もしたいだけできる環境で育ったから、一般社会人のように詐欺だ泥棒だ殺人だといった悪いことをする必要がなかったし、そうした貧乏生活とは無関係のいわゆるぼんぼん育ちだから、人柄

(4ページ下段へ)

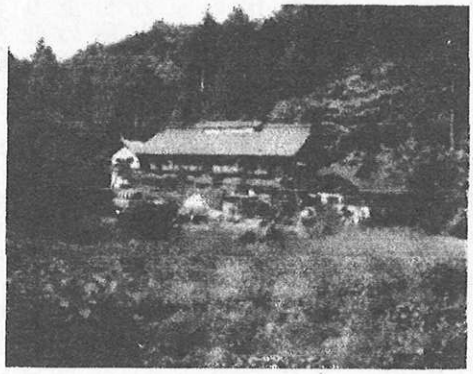
が珍しいものに「樅(もみ)の木」を使った旧家が原市場の曲竹(くせたけ)にある。この材料は棺桶、箱(がんばこ)で死者を収める箱にする。

主人は「いつも棺箱に入っているようなもんだ」とわらっていた。また中藤川の奥、飛村という所に町田蔵雄さんの旧家がある。家の骨組は土台から縁側、柱等は栗の木である。御主人は「体裁は悪いけれど家は頑丈だ」と言われた。

◎旧家の母屋でいちばん目につく梁(はり)にくねくね曲がっているものがある。よくもまあ設計図もなく建築に狂いもなく取り付けられたものである。工具といえば「手斧(ちょうな)」が主体で刃が直線のものと蛤(はまぐり)の貝のように湾曲した蛤手斧(はまぐりちょうな)が使われた。その面影は実物を見ればはっきりとわかる。住んでいる人に言わせると「好んで曲がってる木や節(ふし)こぶだらけの木を使っているわけではない」、真直ぐで見た目の良いものは商品にして現金収入にした。訪問した家で三軒、だて大黒柱と九尺位の通路を隔てた所にもう一本、大黒柱と同じ豪華な柱が建っているその目的が判らないので主人に聞いたら「恵比寿柱という」縁起をかついで建てたという。日本人にとって柱は家屋の構造体のなかでは特に大切に扱われてきた。特に大黒柱は心のよりどころとして神聖視され、いつもぴかぴかに磨かれていた。米糠を布袋に入れて常に磨いてつやを出しているそうだ。別の方法はまづ建前をする時、柱の上をえぐり胡麻油を一升位入れて建てる。すると長い年月のうちにその油が段々と下へ浸透してきて、ぴかぴかに光沢が出て効果が大きい。

おおむね旧家は、背後の山を始め、ぐるっと見える範囲の山は自分の持山だったといわれる。特に裏山は切り出して運搬に労力を少なくするため斜面を利用して建築場所をめがけて落とせる利点がある。したがって念入りに良材を育成し使用しようとする原木は三、四年は寝かせておくそうだ。庭を造るためにも極力家を建てようとする場所へ裏山から山石を掘り出し、目的の場所へ落とし労力を少なくしている。

◎中藤上郷・荻沢の入りの一番奥に武田利昭さんという旧家がある。幕末の頃母屋が火災に遭い古いものは少ないとのこと。今の母屋は明治初期の建物で養蚕を沢山やったことが伺える。旧中藤小学校の東脇の荻沢(谷)を北へ詰めて行き、道が無くなると豪快な間口の広い二階家が目に入る。広い庭は大きな楕円形に見える。今は畠のようだが曽祖父(七代目)以前は池だった。和船をうかべ風流を楽しみ、関東一円から俳句を楽しむ人々が泊まり込みで訪れ、仲秋の名月を賞で酒を酌み交したといわれている。母屋の裏は「大高山」、この山は天覚山(別名両峯山)と尾根を結んでの有名なハイキングコースだ。大高山も当家の持ち山である。先祖に土木仕事に優れた人がいて、低い谷川の水を水車で上げ導水した。当家は六百年ぐらいの歴史ははっきりしている。武田氏の直系といわれ紋所は武田菱である。



武田利昭氏の庭と母屋

あとがき

すでにご覧になった方もあろうが昨年刊行された「飯能の民家」(教育委員会刊一四四頁)は東海大学工学部教授羽生先生をチーフにプロジェクトチームをくみ専門的調査が行われた。農家二十一軒、町屋十九軒がまとめられた。

昨年十一月十二日から「飯能学講座・飯能の民家」が始まり十二月十四日まで文化財講座四日間を含めて行われた。十一月十四日は「古民家と庭を訪ねて」を小春日和の一日、東吾野地内を三十名で見学した。下見、調査を充分行ってあったため立寄った旧家では温かい歓迎をうけた。重文の虎秀の福徳寺阿弥陀堂のお祭りで参加者は落合先生等のお茶の接待を受け大喜び。今回の記事は調査内容の一端である。

(3ページより)

という意味でなら「悪殿」は存在しなかったといえる。そこでQ子ちゃんが言うように、殿様は立派なのに家老や奉行、代官といった悪い重臣家来たちが領民を苦しめた、という話が生まれてくる。しかしそれでは殿様という殿様が家来を見る目が全くなく、悪い家臣ばかり役人に登用していたことになる。それもおかしい話ではないか。そこでおじさんの持論、「江戸封建時代には百姓にとって良い殿様、立派な殿様というのは一人も居なかった。」の出番になるわけだ。

▽えっ！、良い殿様、立派な殿様は一人も居なかった？。そんなことって信じられない。水戸黄門は貧しい領民、困っている領民を助けたりしたっていうし、上杉鷹山など米沢藩の歴代藩主は荒れ地の開拓に努力するとともに、藩内の地場産業の振興に尽したことで知られているし、そのほか武田信玄の河川の洪水防止策(信玄堤)にならって灌漑施設をつくったり農業改善に努力した殿様が大勢いたと聞いている。テレビドラマや時代小説でもそんなふうな物語が多いでしょう。ということは、良い殿様、立派な殿様は居ないどころか大勢いたんじゃないの？。

▼そう、大方の人はQ子ちゃんと同じように考えているようだね。しかし、そんなに農民思いの立派な殿様が大勢いるのかしら、あれほど沢山の百姓一揆が起こるはずがない。

(5ページ下段へ)

飯能祭り

加藤義雄

飯能(旧飯能地区)で、お祭りらしいお祭りが初めて行われたのは中山の丹生(たんしょう)神社のお祭りです。今から三百五、六十年前のことであります。

中山氏の二代目藩主信正は丹生様を篤く敬い、中山村の繁栄を願って盛大なお祭りを行ったのです。豪華絢爛な武者行列が繰り広げられたと「武州高麗郡中山村記録」に記されております。

飯能の氏神様

しかし、その後中山の繁栄は次第に飯能へ移り、諏訪八幡神社のお祭りが盛んになります。諏訪八幡神社は中山信正の曽祖父家勝が創祀した神社ですが、その後飯能村、久下分村の鎮守様として村民より崇められ、縄市で豊かになった氏子達の手によって獅子舞によるお祭りが行われるようになりました。この獅子舞は江戸中期に始まったと言われておりますが、その後次第に盛んになり、嘉永四年(一八五一)には金子村より棒遣いを伝習しております。当時の飯能地区には、原町の八幡様、中山の天神様、川寺の神明様、双柳の稲荷様等のお祭りがありましたが、獅子舞は諏訪八幡神社の外にはなく、原町の八幡神社のお祭りに頼まれたことがあるようであります。いづれに致しましても、当時のお祭りは神社の参道前に高いのぼり旗が二本立てられ、飴売りや駄菓子売り等の店が門前に軒を連ね、晴着姿の善男善女で賑いました。

囃子と山車(だし)

さて、明治になりますと囃子と山車が飯能にも出現します。囃子が飯能へ入って来たのは明治二年のことで、原町の人達が川越の飴売りコウさんから習ったのが始まりと言われております。この囃子は小田原囃子(神田囃子)若狭流で、その後原町から河原町、本郷、宮本町、前田、柳原、中山へと伝わりましたが、これとは別に、神田囃子大橋流と言う囃子が明治の中頃、入間市の新久より下畑を経て三丁目へ伝わり、二丁目へも大正十年に伝わりました。また一方、明治二十五年には新久から仏子を経て双柳へ伝わり、双柳から大正七年に一町目へ伝わりました。

飯能で一番先に山車を造ったのは原町です。明治十五年と言われております。そして、明治二十四年には原舟月作の神武天皇の人形をのせました。河原町は明治三十七年に静岡の浅間神社の山車を伊勢参りの帰りに買ってきました。三丁目では明治十七年に荷車二台をつなぎ合わせて山車のようなものを造って曳いたと言われていますが、本格的な山車を造ったのは大正四年です。本郷は大正四年に下畑から山車を購入しました。そして、双柳は大正元年に、一町目は大正九年に造りました。二丁目は大正九年に砂川村より買入れ、宮本町では大正十四年に造っております。そして戦後になり、前田と柳原が昭和二十二年に、中山が昭和五十三年に、双柳が二代目の山車を平成三年にそれぞれ建造致しました。

また山車と共に各町内会は底抜屋台を造りました。戦前は双柳、一町目、原町、三丁目だけでしたが、柳原が戦後昭和二十一年にいち早く建造し、続いて各町内が競走して造りました。

以上、囃子の伝播と山車・底抜屋台の建造について述べましたが、興味深いことに、囃子も山車も獅子舞も持たぬ八幡様の原町が一番先で、その後諏訪八幡神社の氏子の河原町が原町に負けてならじと静岡より山車を買い、三丁目が更にそれを追いかけたようで、そこには各町内のライバル意識が感じられます。

このようにして、明治末には囃子と山車が出現しましたが、大々的に山車を曳き廻した最初のお祭りは大正四年の御大典です。この時は、原町、河原、三丁目の山車が曳き廻され、(本郷は不明)二丁目は下畑より山車を借りまして町内の人は桃太郎鬼退治の仮装をして山車を曳いております。当時の写真を見ますと、家々の軒先には提灯が下げられ、各町共、山車の前に揃いの着物を着た町内のお歴々が立会い、万灯を先頭に裁着(たっつけ)姿の手古舞、金棒曳きがずらりと並び、そのいでたちは豪華なものでした。

この御大典を経験して、山車を持たない町内会は、山車がなくてはと

(4ページより)

▽江戸時代はそんなに沢山の百姓一揆が起きたの。

▼前回でも触れたように一揆が多発した。想像でいいんだが、Q子ちゃん、近世の約三百年に何件くらいの一揆が発生したと思う?。

▽そうねえ。わからないけど、たくさん発生したから、五十件、百件、いや年一回発生したとして三百回。これちょっと多すぎるかしら。

▼実はね、三百回どころか記録されたものだけでも六千八百八十九件(一揆研究書として権威のある青木虹二著『百姓一揆総合年表』より)も発生した。年一回どころか年二十件余りも発生している。一揆は短いもので一週間、長いものになると二年、三年と続いたから、毎日、どこかで一揆騒動が起きていたということになるわけだ。善政を施していたという水戸黄門の地元でも、米沢藩でも、大規模な塩田開発で地場産業を起こした赤穂藩でも、沢山の一揆が起きている。江戸時代には全国約三百の藩があったが、一揆の起きなかった藩は一つもなかった。ということは「良い殿様」と言われる藩主たちが行ったという灌漑施設や産業開発は実は百姓の為ではなく、より多くの収穫を図る為であったわけで、だから灌漑施設で農作物が多く穫れるようになっても収穫物はみんな年貢で巻き上げられてしまう。だから農民は労働だけ加重になっても、暮らしは少しもよくならない。死ぬか

(6ページ下段へ)

思ったのでしょう。一町目は早速協議し大正九年に造りました。そして二丁目は一丁目に遅れじと同年十月山車を購入し、宮本町もそのあとを追って大正十四年に山車を造りました。

飯能の祭りの歴史

諏訪八幡神社の祭日は昔から九月二十六日、七日でしたが、何時の頃かよくわかりませんが(多分大正になってからと思う)原町の八幡様も一緒にやるようになり、飯能秋まつりは一段と賑やかになりました。そしてその様な中、昭和三年の昭和天皇の御大典は六ヶ町の山車が全部出て、かってない盛大なお祭りが行われました。一町目町内会の記録を見ますと、ほうずき提灯を千個注文して町内全戸に配っております。大祭は十一月十日より十六日まで一週間行われ、全戸連日国旗を揚げ提灯に点火し、十四、十五、十六の三日間、山車を曳き廻しております。

ところで、飯能の秋祭りは提灯祭りと呼ばれ、傘万灯で有名でした。大通り、出口通り(銀座通り)はもとより高麗横丁の一部にも傘万灯が全戸に立てられ、極彩色の武者絵の大きな提灯が色あざやかに点灯されたのです。そして、河原町でも屋根付の提灯棒が名栗街道に岩根橋まで立てられ提灯にローソクが点されました。当時は未だ電灯が少なく、街灯もランプでしたから傘万灯の提灯が一際映え見物人の眼を楽しませたと思われます。昔の優雅なお祭りの有様が眼に浮かびます。傘万灯は大正の頃から始まり昭和二十二年頃まで立てられましたがその後残念ながら姿を消しました。

昭和十五年には紀元二千六百年奉祝祭りが行われました。当時は支那事変の真最中でしたが、国威宣揚の国家的行事として国を挙げて行われたもので、二日間に亘り各町全部の山車が出て盛大でした。私は当時、中学生でしたが、毎年行われる秋祭りには山車を出さない町内もありましたので、物心ついて初めて全町内のパレードを眼の当りにして感動したことを覚えております。

しかし、その翌年の昭和十六年には大東亜戦争(太平洋戦争)が勃発し、恒例の秋祭りも昭和十七年を最後に中止になりました。

(昭和十七年秋祭り　中清商店前)

ここで天王様の夏祭りについて述べさせて頂きます。天王様の夏祭りは三丁目の八坂神社のお祭りで、毎年七月十四、十五日に行われます。八坂神社は飯能村の小川房吉と言う人が文政七年(一八二四)に神久山から今の所へ勧請したと言われておりますが、大正の頃までは、この辺は天王籔と言って篠笹が群生して淋しいところでした。しかし、その後五ヶ町が力を入れ、昭和六年には御輿と車付の大太鼓を新調し、子供の樽みこしを出して、疫病退散、商売繁盛の夏祭りを盛大に行いました。

そして戦後は五ヶ町の外に原町、柳原、前田も加わり、底抜屋台のパレード、引合せ等を行い賑やかなお祭りに発展し、今では十一月の飯能祭りと並んで飯能の二大祭りとなりました。尚、五年に一度飯能河原で川瀬祭りを行っております。

昭和二十年八月、敗戦となりましたが、飯能のお祭りは不死鳥の如く早く復活し、その翌年盛大に行われました。驚いたことに、前田と柳原は前述の如く昭和二十二年には山車を造りました。敗戦で荒廃し、食うや食わずの食糧難の中、よくぞやったと感心する外ありません。

その後、お祭りは年を追って盛大になり、昭和四十六年には全市を挙げての飯能統一祭りに発展し、祭日も十一月二、三日に変わりました。

さして、今年は第三十二回を迎えましたが、またまた県知事をはじめ、四ヶ国の大使館から高官が来飯し、今や飯能祭りは海外にまで知られるようになりました。

以上飯能のお祭りについて述べて参りましたが、祭りは庶民の文化です。長い伝統をもつ飯能祭りの益々の発展を祈念して筆を擱きます。

(5ページより)

生きるかの生活に苦しんでいたわけだ。日本の農民は元来、古今を通じて我慢強く、争いの嫌いな保守的な民族。そうした温和な人々が鎌や斧、のこぎりを武器に暴動を起こした。これは我慢の限界を超えた困窮状態にあったことを示しているといえると思うよ。

▽なぜ農民にとって良い殿様、りっぱな殿様がいなかったのかしら。

▼そこが殿様と農民の関係を見るうえで最も重要な所なんだ。封建時代の幕府将軍家の支配体制の根本は「小人閑居して不善を成なす」と考えられていた。すなわち小人(こどものことではなく素養のないおとなたち、いわゆる百姓とか下々の者のこと)は暇な時間を与えたり、お金に余裕が出来ると、本を読んだり話し合いをしたりと不善(悪いこと)ばかりするので金や暇を与えてはならない。「百姓は生かさず殺さず働かせ収穫物を出させる」のを基本に据えていた。百姓たちに楽々生きるようなことをさせてはならぬ。ただし殺しては元も子もないので死なない程度に働かせ、収穫物を取り立てる、というわけだ。

▽へえーひどい話ね。けどなかには農民の為を思って藩政を施した殿様もいたことはいたんでしょ。

▼そう、さっきおじさんは、良い殿様は一人も居なかったと言ったけど、なかには確かにいた。たとへばキリシタン大名のように百姓の暮ら

(7ページ下段へ)

随筆　郷土館のイベント

大野悦子

月に一度、郷土館の会議室をお借りして随筆のサークル活動をしている。

飯能河原から前に広がる丘陵の景色は春の桜から始まり、雑木々がさまざまな色に芽吹く新緑は花にも勝る美しさである。そして紅葉に続き、物みな枯れ果て色彩がなくなる頃は雪景色が見られ、これがまたとない絶景である。

小高い郷土館からは、この四季折々の大自然の景色がパノラマのように眺められる。この楽しみがあるからこそ、ちょっぴり苦しい作文の宿題にも熱が入り、せっせと通っていくのだった。

郷土館は「昔の農機具」とか「明治の写真」などいろいろな特別展があってその都度、見学をしている。この間は「うちおり」展を見た。明治、大正時代の着物の移り変わりの実物を見ながら、どこぞの家の箪笥の隅にまだ残っているような品々を懐かしく思った。

この時は受付に行くと千代紙で折った花嫁人形がいただけたりと、なかなか粋なはからいもされていた。

この間、少し時間があったのでロビーのカウンターの展示物に目を通した。

「飯能の蔵」「飯能の古い橋」「飯能のお寺」「飯能の神社」「飯能の民話」「飯能のこま犬」「飯能の織物」などが研究発表の形で十枚ぐらいの画用紙をホチキスでとめて冊子になっていた。

写真の下に大きな字で簡単に纏めた説明が書いてあり、どれも自分たちの足で調べたものだし、この地方の身近なもので楽しく読んだ。

飯能一小五年生のみなさんの作品である。「うちおり」展を見たばかりだったので「日本の織物」に目をこかれた。解り易く上手く纏めてあって興味深く大変勉強にもなった。

飯能地方のこのような書物は立派な本にもなって何冊も出ているが、最近細かく書いてあるマニアルの類は読むのが面倒になって私の脳からは時々拒否反応さえでている。

パソコンで文章を書いていると、漢字は変換を押せば機械的に出てくるし、頭脳で考える感覚は衰えるばかりだ。

随筆の勉強会に入る前に先生が持ってこられる、五、六年生の漢字書き取りのテストをしてみるが、この程度ならばなんとか合格点はとれている。年を取った分だけ脳は子供に返っていくのだろうか。

今の私は小学生の皆さんの作品が心地よくすんなりと頭に入ってきたのだろう。

思わぬ所で楽しい作品に、出会い、かなり若返った気分になったのだった。

随筆　裂き織りの知恵

小沢和子

飯能市の郷土館で「うちおり」展を見た明治・大正時代の女の、優しさとたくましさが伝わってきた。その「うちおり」展の中に見る同性の賢さを、肌で学んだことがある。

機械織りを習い始めた私は、最近裂き織りに関心がある。裂き織りは、古裂(こぎれ)を幅一センチくらいの細かい紐(ひも)状に裂いて緯(よこ)糸にし、新しい布を作り出す。裂いた布は予想も出来ない色柄に織り上がり、元の布とはまったく別の表情を見せてくれる。その上不要な古着は形を変え、再び生活の中に生きるので一石二鳥だ。

「いらないものは、どんどん捨ててね」そう言いながら、友人の大野さんが玄関に大きな段ボール箱を運んできてくれた。明治生まれだったお姑さんの残した物だそうだ。

中には、帯、衣類を仕立てた余り布、解いた着物など古裂がびっしり。驚いたことに、ほとんどの布に丁重な洗い張りがしてある。擦れて薄くなった部分には、当て布がされ細かく繕われている。繰り返し繰り返し丹念に使われた様子がうかがえた。

さっそく糸作りを始めた。古くなった絹はよく裂けた。ピリピリと紙

（6ページより）しを少しでも良くしようとか、奴隷のような無権利状態を改善しようとした藩主も居るにはいた。けれどそうした殿様は幕府の(百姓は生かさず殺さず働かせる)とする方針に逆らう危険思想の者だとして処罰されてしまう。だから良い殿様というのは生き延びられなかった。したがって農民にとっての良い殿様は居なかったということになる。

▽でも時代劇ドラマを見ていると、良い殿様たちが「農民は世の中の最も大切な宝。大事にしなければならない」などと家来たちに論すシーンが多い。あれ、うそなの。

▼建て前と本音の違いとでも言えるのではないかね。たとえば領民にとっては神様のような存在の殿様が田畑で働く農民たちに「無理するな。からだをいとえよ」などと声を掛ける。すると農民たちは涙を流して「なんて立派な殿様だろう」と感激する。しかし年貢の取り立ては代官や奉行によってびしびし行う。ということで、良い殿様は居なかった、ということになる。困った領民を助けるという話も美談として拡大宣伝される。しかし助けられる領民は極一部。大多数の人々は少しも救われない。殿様の美談やお恵みでは大多数の農民は救われないわけだ。

▽結局封建時代の殿様は真に百姓思いでは存在できなかったというわけね。Aおじさん、今日はどうもありがとう。

（文責・吉田靖）

が破けるような音をたて、小気味よ裂けた。たちまち色とりどりの糸に変身した。まるで絵の具のよう。機の上をキャンパスにしてどんな絵を描こうか、ますます高揚してきた。

箱の中には、使い古した日本手拭いも山のようにあった。窓拭きや雑巾にするには惜しい。そこで考えたのが、藍で染めブルーの布糸として裂き織りに生かすことだった。その古手拭いは浴衣を解いたものだったそうだ。お姑さんは、新しい手拭いがたまるとまず浴衣に仕立て、十分着古した後始めて手拭いとして頭にかぶったという。さすが「明治の女」と感心しながら、帯のことも思い出した。ふだん使いらしい半幅の帯の芯には、なんと着古した洋服の身ごろが入っていたのだから。

貴重な布を、大切に最後まで慈しんで使う。時代や暮し向きにかかわらない、賢い女の知恵であり優しさであると思う。どんなに生活が豊かになっても、忘れてはならない心だと深く反省した。

「布を裂いて布を織る」なんて格好よく言っていたが、布を裂くという行為は勇気がいる。まして着た人の命の通った衣類は、軽々しく裂くことなどできない。とことん布として生かし、いよいよくたびれた時の最終手段が裂き織りで、それだからこそ古くから受け継がれてきた生活の知恵なのだろう。

郷土館の「うちおり」展の展示物も、箱の中で眠っていた古裂たちも、「慎ましく堅実に生活する基本は、昔からなにひとつ変わっていないのだよ」と、無言で話しかけているように思われた。

新年度事業計画
飯能郷土史研究会の活動

◎　平成十四年度事業報告

▽総会四月二十六日(土)
講演会「中山氏と飯能」
講師　飯能市教育センター所長　浅見徳男氏

▽例会
○　六月二十三日
「飯能の民家と庭」　講師　丸山清氏
○　八月二十四日
「高萩の殿様中山氏」　講師　吉田靖氏
○　十月二十六日
「中山氏の菩提寺、智観寺を訪ねて」
○　十二月十四日
「飯能の祭り」　講師　加藤義雄氏
○　三月七・八日
「高萩市交流見学会」　郷土館友の会と共催

◎　平成十五年度事業計画

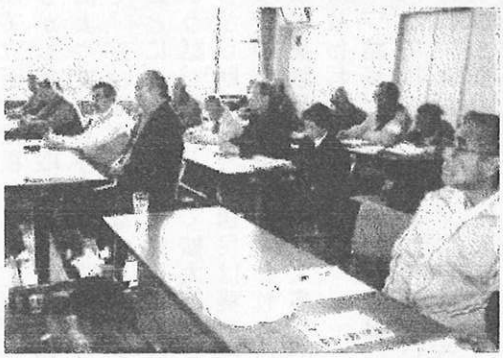
▽総会　四月二十六日
歴史講演会「飯能縄市の景観」　講師　尾崎泰弘氏（前飯能市郷土館学芸員）

▽例会開催
○　六月二十八日(土)
高萩市交流見学会報告
高萩市と『高萩市歴史散歩』　講師　大野邦弘氏
○　八月二十四日(日)
「西川材山仕事」(仮)　講師　中里吉平氏
○　十月飯能市郷土館特別展協力
○　十二月十三日(土)
「飯能の古文書から」(仮)　講師　中里和夫氏
○　二月二十二日(土)
「飯能の植物」(仮)　講師　内野博司氏

「郷土の歴史を学ぶ」というテーマで開催し、各地域の歴史にふれようということからはじまりました。

本年も引き続き、各会員の研究発表や体験を中心に活動していきます。ふるってご参加ください。会員以外の人にも声をかけご参加おねがいします。

飯能郷土史研究会
会員募集中
申し込みは事務局まで



１２月例会の写真

表紙写真

明治二十七年、河原町の町内有志が「お伊勢参り」におもむいた際、途中の静岡市にて現在の山車を見つけ百円で購入、人馬で半月ほどかけて飯能に持ってきたという。明治十年代に東京浅草で建造されたようだ。平成十三年

飯能市有形民俗文化財指定

郷土はんのう　第二十三号
発行日　平成十五年三月三十一日
発行所　飯能郷土史研究会
(〒三五七―〇一二一)
飯能市中藤上郷四の三
岸道生(破草鞋窯)方
電話七七―〇六五四
題字　大野邦弘
表紙写真
柳原囃子保存会提供